

【活動報告】

人間福祉学会 活動報告

広島文教大学 人間福祉学会 事務局

I. はじめに

本学科は開設以来 20 年以上が経過しました。この間、多くの卒業生を福祉専門職として輩出し、それぞれが地域で実践を重ねています。一方で福祉専門職だけではありませんが、若者の職場定着は社会の課題となっています。今回は、長年勤務を継続している卒業生に登壇いただき、実践の中での苦労や葛藤、挫折体験の克服経験や、そのための工夫ややりがいをお話いただき、共有したいと考え企画しました。在学生にとっては、これから働くことを考える上での不安や悩みを少しでも解消してもらえる機会に、また卒業生にとっては、経験年数によって違いはあれ、他者の経験から自身の実践を振り返る機会としました。

II. 内容概要

- ・開催日時：2025（令和7）年11月1日（土）
- ・テーマ：「私の挑戦—現場での取り組みが教えてくれたこと」
- ・コーディネーター：中村卓治 教授
- ・シンポジスト：名前（期）、現在の勤務先、職種
藤井 ひかりさん（2期生） 医療法人社団吉田会 吉田病院
三口 美由紀さん（6期生） 社会福祉法人 広島県社会福祉協議会
谷貝 実可さん（11期生） 社会福祉法人清風会 つばさ

III. シンポジウム

李木（会長）：開会あいさつ

本日はお忙しいなか、令和7年度 人間福祉学会にお越しいただきありがとうございます。また、学会の事務局を担ってくださっている先生方、今年度の学会の開催に向けての準備や計画、そして本日の運営ありがとうございます。この人間福祉学会は、2002年12月14日に誕生しました。学会が発足して23年が経過しようとしています。この年、あわせて人間福祉学会誌である『人間福祉研究』の発刊を開始しました。現在は WEB 上での公開になっています。

その創刊号に、初代学科長、岩崎貞則先生がこのような文章を載せられています。「この手の学会は往々にして形骸化する傾向があります。その原因は一言で言うと初心を忘れるからだと思います。例えば、人間福祉を学ぼうとした動機や、人間福祉の学問や理論を、生きるためにどう生かし、どんな人生を送

るつもりであったのかを忘れてしまい、あるいはそんなことも考えないで華々しく脚光を浴びることに注意を向けて表面的な厚化粧に専念しようとするからです」。

このことを考えてみると、人間福祉学会もその母体である人間福祉学科も、華々しいことはほとんどありませんが、山あり谷ありの中で社会福祉に寄与するよう、地道に活動を行ってきたように思います。そして卒業生の多くが地道に人間福祉に向き合っているように思います。その結果として、人間福祉学会も人間福祉学科もあるのだと思います。その積み重ねの中で四半世紀が経ちました。今年の間人福祉学会は、「私の挑戦—現場での取り組みが教えてくれたこと」というテーマです。人間福祉学科はこの春、22期生が卒業しました。22年間卒業生を送り出していると、国家資格を生かしながら、同じ法人で、地道にキャリアを積んでおられる卒業生がいます。その中で今日は3人の卒業生をお招きして、お一人おひとりが、どのようなキャリアを積んでこられたのか話を伺うことになっています。見方を変えると、3人それぞれのライフヒストリーを伺うことになるのだと思います。社会福祉専門職の役割という視点だけではなく、その人生の一部を開かせていただき、人間理解を深めるという視点からも考えることができたらよいと思っています。

在学生は先輩の話を聞いて、自分の未来を思い描いてくれたらよいと思っています。先日、学校生活のことで悩んでいる高校生と話していて、相談のなかで、今の自分にできることを積み重ねて、未来の自分に納得できるようにしたいと名言を言ってくれました。積み重ねることが未来につながっていく人もそうですし、学会もそうだと思います。積み重ねていくための手がかりを本日のお話の中から得られたら良いと思います。本日は短い時間ですが、参加者の皆さんにとって有意義な時間であることを記念して、私からの挨拶といたします。

中村：

今回は、「私の挑戦—現場での取り組みが教えてくれたこと」というテーマですが、この学会は卒業生あつての学会だと思います。しかも形骸化せずに、毎回、開催するテーマも含めてアップデートしながら開催できています。これは卒業生のご協力あつてのことです。昨年は二資格の国家資格を活用した経験者にご登壇いただき、専門性の違いや立場が違っても、共通する普遍的な内容を確認、整理するという形で進めました。国家資格の有効性や実践の中で大切な価値等を再確認しました。そして、この業界だけでなく社会全体で取り組まないといけないのが職場定着という課題だと思います。

4年生大学で学んで、社会に旅立っている若者達が、3年以内に3分の1が離職します。これは福祉だけではなく、そこに何か大きな課題があるわけです。ただ、裏を返せば、様々な課題を乗り越えて、同じ法人で定着し続けている人たちもいます。そういう方々にヒントをいただくということで、本日は3名をお招きしました。学生時代の体験、いわば原点からお話していただきたいと思っています。それでは、藤井さんからよろしくお願ひします。

藤井：

藤井です。よろしくお願いいたします。私は江田島出身で、学生時代は寮で過ごしました。実家を離れて生活して自由を手に入れたと思いました。アルバイトやボランティア、友達と遊ぶというような学生時代でした。そして、今の仕事に一番影響を受けたのはボランティアだと思います。きっかけは、実習に行く前に当事者の人と関わりを持ってみたいと考えたことでした。共同作業所を先生から紹介してもらって週に1回お邪魔するようになりました。当時、学生ということもあって、利用者だけでなく職員、地域の方にすごく可愛がってもらいました。今振り返ると、この経験がベースにあると思っています。何も知らない学生だからこそ、色々な話を聞けたし、お菓子を作ったり、下請け作業をさせてもらったりしました。就職は、共同作業所を希望しました。しかし、両親から地元に戻ってほしいと言われ、吉田病院のソーシャルワーカーに就職しました。

三口：

私は当時、大学のわりと近くに住んでいて、自転車で通っていました。この大学に進学をきめた理由は医療ソーシャルワーカーになりたかったからです。漠然と病院で働きたいというイメージの中で、社会福祉士、精神保健福祉士の両資格を見据えて勉強していました。実習は県立病院や特別養護老人ホームに行かせてもらいました。アルバイトは介護付き有料老人ホームでしていました。ゼミの先生にお願いして、実習以外でも行きたい病院を紹介していただいてボランティアに行かせてもらいました。障害福祉分野も外出支援を経験させてもらい、とにかく色々な経験をしたように思います。その中でも1回は病院で働きたいという思いがあったので、病院の就職活動をしましたが、採用にならず、国家試験の勉強もしないといけないこともあったのでそちらを優先して、4年生の2月、3月くらいに就職活動を再開しました。そもそも病院に就職したいと思っていたのも、退院した後、安心して地域で暮らせるようにサポートする関わりができたという考えがあったので、社会福祉協議会の嘱託職員として採用いただき、今に至ります。

中村：

三口さんの学生時代の実習は社会福祉協議会の受け入れが、あまりなかったですね。だから、学生のうちに内情を理解するのが当時難しかったように思います。よくチャレンジされたと思います。先駆的な取り組みをされました。

谷貝：

改めまして谷貝です。よろしくお願いいたします。地元は、文教に近いところでしたが、現在は職場に近いところに住んでいます。文教を選んだ理由は、介護に関心があったからです。大学に入って精神保健に関心を持ったことをきっかけに社会福祉士と精神保健福祉士の資格取得を選びました。勉強を進める

中で、ボランティアとアルバイトで障害福祉施設の障害のある方と関わらせていただき、そこでの経験で関わるのが楽しいというか、関わる壁みたいなもののハードルが下がったということが福祉の道に進むきっかけになったように思います。実習は病院や地域支援の事業所でさせてもらいましたが、実習の経験だけではもしかすると今の仕事には就いていないかなと思います。なので、やはりアルバイトでの障害者の方との関わりが大きいように思います。就職先に悩みましたが先生に相談させていただき、清風会を受けてみることにしました。清風会を選んだ一番の決め手は、たくさんの事業を展開されていて、様々な経験ができるということでした。現在、就職して12年目になりますが、基幹相談支援センターや相談支援事業所など色々な経験をさせてもらっています。

中村：

三者のお話を伺いましたが、様々な出発点がありました。藤井さんは、地元に戻るか帰らないか、三口さんは、もともと目指しているビジョンがあったが、社会福祉協議会にチャレンジをして就職され、その後の就職活動の糸口を作られた。そして谷貝さんは清風会ですが、現在は卒業生が毎年のように就職されています。

では、簡単な事業所の紹介とご自身の業務についてですが、10年～20年選手ですので、部署替えて担当や役割も変わってきていると思います。これまで体験した業務内容や役割についてもお話いただける範囲でお話してください。

谷貝：

清風会は、障害のある方が、病院やホテルのリネンのクリーニング関係で働く場所や住む場所を提供する事業をしています。クリーニング作業は、大きな機械を扱いながら大量のリネンを障害のある方と職員が共同して取り組んでいます。夏場は40度近くになる工場内で8:30～17:00働かれています。働くことを通して、生活リズムを整えることや、社会性を身に付けていく支援を日々させていただいています。私は、サービス提供責任者として、個別支援計画の作成をしています。計画をもとに支援をしています。利用者の方も日々状況も変わりますし、どのようにアプローチしていくか、いつもチームで考えます。支援者間の協力や関係機関との連携を日々行っています。

中村：

皆さん「清風会」というトラックを見たことはないですか？県内初の福祉工場を作られた事業所ですね。経済的な自立を目指すことがコンセプトですので、働くことも真剣に、報酬もしっかりいただくという形で取り組まれています。

三口：

社会福祉協議会は、誰もが安心して生活できる街づくりを目指して様々な業務に取り組んでいます。地域の困りごと相談やボランティア活動の斡旋、被災者支援、さらには福祉の人材確保など幅広く取り組んでいます。県社協という立ち位置は利用者の方が目の前にいるという関わりではなく、実際には市町にも社協があるので、街づくりが円滑に進むよう後方支援をすることが中心です。私は16年目になりますが、入職当時は地域福祉課で、何をするとどこかわからず日々業務をしていました。東日本大震災の時に災害ボランティアを運営した時に、全国レベルで取り組んでいくことを経験させていただきました。県社協内ではいくつも部署がありますので、異動の経験をし、仕事の内容を理解するようになりました。コロナ時は、生活困窮に陥った方への貸付制度担当、4年前から地域福祉課へ戻って民生児童委員さんの後方支援をさせてもらっていて、活動しやすい環境づくりや啓発活動をしています。県社協に入って4回異動していますが、多様な仕事をしてきたと思います。携わってみて初めて知るといふか、学びなおすという状況です。

中村：

県社協での役割を伝えてもらいましたが、たくさんの方の後方支援をされていることが伝わったと思います。関心のある方は参考にされるといいですね。それでは、最後、藤井さんお願いします。

藤井：

私は精神科病院に20年くらい勤めています。母体は入院施設を持っている病院で、精神科のデイケア、介護保険下の居宅介護支援事業所や小規模多機能事業所もあります。私に関わるのは精神科病院の入院と外来になります。112床のベッドがあり、現在90の方が入院されています。現在は治療が確立されてきて、外来通院で在宅生活ができる方が増えてきたことと、社会の影響によって長期入院を余儀なくされた方が高齢になって亡くなることが多い印象です。介護を必要とする認知症の患者さんがこの20年間で増えています。そのため症状への個別対応が必要となり、相部屋をそのまま使えなくなっているのが現状です。入院患者さんは5割くらいが統合失調症の方で、長期入院の患者さんです。あと3割から4割くらいが認知症の患者さんで、新規入院のほとんどが認知症の患者さんです。他は、気分障害、うつ病や双極性障害、依存症の方です。私は相談室に勤務し、患者さんの相談や家族の相談に対応しています。入院の場合、お金の心配、例えば生活保護や年金などの制度、他に家族関係の相談に対応しています。あとは、退院支援、入院形態にかかる書類の申請などが業務です。間接業務も増えています。外来医療費の説明や院内の委員会活動は、病院全体で患者さんとの関わりをどうしていくか考えることに繋がっています。相談室に20年前に入りましたが、異動はなく、長年同じところで長年患者さんと関わっています。その方の出産などライフストーリーを身近で感じることができることを幸せに思います。一方で当事者にとっては、私以外の担当にならないので、これでいいのだろうかという葛藤があります。この

ような形で20年過ぎている状況です。

中村：

大学では、どのようにソーシャルワーカーになろうかとか、どう成長しようかということがどうしても中心になりますけれども、今の藤井さんのお話にもありましたが、組織の中で与えられる役割はたくさんありますね。組織を支える役割も大切です。様々な働き方を三者から伺いました。

ここからは今日の本題になりますが、働くことで見えてきた実践上、大事にしたいことを伺ってきたいと思います。それでは、卒業当初から支援観がどのように変化したか、そして、今はどのようなことを大切にしながら実践を続けているのか、利用者と向き合っているのかということをお伺いしたいと思います。

藤井：

私は当時、授業での学びをベースに仲間と熱く語った思い出があります。その中で、自分の中で専門職像のイメージをもって就職しました。今考えると、就職した当時の私のイメージはとても偏った正義感だったと思います。患者さんは社会から悪影響を受けた被害者であって長期入院を余儀なくされ、医師を中心としたパターナリズムの下、辛い思いをされている患者さんに、精神保健福祉士としてソーシャルワーカーとして何かできること、具体的には長期入院を退院へ持っていくことが求められる支援だと偏った思いをもって就職しました。その偏った思いがあるので現実とのギャップに驚き、悩むことが多かったです。でも、客観的に見ていくと、社会や制度によって今の状態があることがわかり、病院では患者さんを中心にして、医師も看護師もものすごく温かく支援に取り組んでいました。冷静になってみると自分自身が偏った考えをもって、自分のやりたいことを患者さんに投影していただけたというのをすごく感じました。出会った患者さんの生活が、その人にとって幸せで、その人らしい人生であることを願いながら関わりを持たせてもらうことが一つの支援観としてあります。

中村：

当時のことを私も思い出しながら伺いました。実習報告会で、1期、2期生の時は、外部スーパーバイザーとして関わらせていただきましたが、皆さん（入院患者さんの処遇の厳しさやそこに何も手を差し伸べられない自身のもどかしさを思い出し）泣きながら報告されていたのがとても印象的でした。学生たちの感受性の豊かさと文教の教育の良さを実感しました。

三口：

卒業して、あこがれのソーシャルワーカー像を持っていたかということ、正直持っていませんでした。県社協ってどんなところ？から仕事をスタートしているので、「地域づくり」も一人ひとりがイメージや

思いが違ったり、それを実現するためにどうしていくのが社協の仕事ですが、今でいうと例えば、地域共生社会には、一人ひとりが役割、生きがいをもって生活するという考え方があっても、それをどう進めていくかという・・すぐに形になるわけではないです。なので、小さな1個ずつを進めていく仕事だと思っています。今仕事のなかで、積み重ねていくことが大事だと感じているところです。福祉介護の人材確保の取り組みにしても、一個やったからといってすぐ、やりたい人が増えるわけでもなく、発信し続ける、職場改善の何か取り組み続けるみたいところが大事だと思っています。それを社協として地域の方、行政の方、市町の社協の方と一緒に重ねていくというか、ずっとやっていくということが大事なのかなあとこの16年、日々感じています。

中村：

県社協は形のないものを作っていく、周知していく、根付かせていく。ないものを作っていくというのはとても力のいることで難しいことだと思います。だから、1回ではなくノックし続ける。継続し働きかけ続けるところが、業務していく中で身につけてきた、ということなんです。

谷貝：

私も支援者としてこうありたいということはなく、先生に紹介されたまま入職しました。働き始めてすぐ、基幹相談支援センターの立ち上げに関わらせていただきました。センターのこともわからず始めて、困りごとや、時に困難事例の対応をして、右も左もわからない、どう支援していけばいいのか、どう進めていいのかわかりませんでした。先輩の後をついていきながら、日々学ぶことばかりで3年間過ごしました。支援以外に自立支援協議会の事務局などの仕事も担い、そこもよくわからない。わからないなかでも、他の法人や役場とのつながりができました。今は困ったときに相談しやすかったりしています。当時はとても大変でしたが、今となっては良かったと思います。そのあと、相談支援事業所に配属されました。利用されている方の計画相談を担当させていただきました。200人くらいの利用者の方たちの計画を全員ではないですが、基本的には2人で立てていました。計画の作成に追われて、相談にのれているのか葛藤がありました。しかし、直接利用者の方とコミュニケーションを取ることが多かったため、この経験も今に生きているかなと思います。その後、グループホーム、今は就労系にいます。もともと学生時代のアルバイトが就労系だったので、その時のイメージでいましたが、清風会は工賃が保証されているということもあって、ゆるやかな作業内容ではなくバリバリな作業内容で取り組んでいます。その作業にはメリット、デメリットがあって、B型事業所の在り方に今は葛藤を感じています。利用者の方の体調と仕事の量の折り合いを見ながら、どの程度の声かけが必要か悩んでいるところです。最近思うことはピアと言いますか、利用者さん同士の支え合いと言いますか、職員が声をかけるよりは、利用者の方が一緒に頑張ろうやと言合えるほうが、重い腰が上がるというか、そういう場面を見る機会が最近すごく増えていて、そういうのを大事にしたいと思っています。

中村：

とても実践レベルの高いところからのスタートで、清風会が行政とタイアップして作った事業所に配属になりましたね。どこから手を付けたらいいのかわからないというような事例を取り扱うことになって、専門性の高い、丁寧に支援しないと解決しない実践を始められました。500~600人いる利用者の膨大な作業内容を、ある意味、さばいていかないといけない、本当は作業の区切りの中で、達成度合いを振り返るツールであるけれど、それをしていたらさばききれないという葛藤がありました。出発点でもあった丁寧に支援をしていくという基準が今でも定着しているということは、その葛藤は非常に大切で、問題意識をもちながら前向きに今の課題と向き合っている姿は大切ですね。そして、支援の原点である当事者同士の繋がりを大切にすることが膨らんできたということですね。

残りの時間は、今までの離職危機や失敗体験、挫折体験などを乗り越えた条件や、今、振り返って大事だなと思うことを最後にお話しただけたらと思います。

谷貝：

お伝えしたように、葛藤している日々があるので正直辞めたいと思ったことは何度もあります。そこから脱することができたのは、様々な事業所を経験させてもらっていたので、異動するたびに仕切り直しが出来たからだと思います。あとは職員同士で思いを共感できる人の存在が大きいと思います。同じ文教を卒業して入職してくださってる方は、同じ先生から学んだ同じ思いを持っているので一緒に働いていると思うだけですごく心強いです。こういった場や実習指導の場で、先生方にしんどい思いを聴いてもらって、考え方を変えるきっかけになっていると思います。周りの人にとっても支えてもらっていると思っています。

中村：

安心して思いを吐き出せる場があるということと、これは賛否両論があるかと思いますが、人事異動が谷貝さんには合っているということですね。

三口：

この16年間辞めようと思ったことが私の場合はなかったです。求人票をみたら待遇が今より良いところもあります。異動先の業務が自分に合うあわないでしんどいと思うことはありました。私も文教卒の同級生が1人いて、他にも同期や同じ部署だった方に話を聞いてもらえるので、相談できる存在に思いを吐き出させてもらっています。気にかけてもらって、この16年間続けてこれています。

中村：

人に支えられてとか、相談する場所があつてというのが一緒でしたが、ご自身が同僚と良好な関係に

なるために工夫されていることとかありますか？

三口：

意識していることということでもないかもしれませんが、私も16年いるので、コミュニケーションは日々大切にしています。

藤井：

私は結構思っていることを口にしてしまうタイプなので、辞める辞めると人に会うと言ってる気がします。辞めたいと思うときはどんな時かと思返してみると、自分の考え方と合わないとか理解できないと思う時だと思います。様々な人と会話すると、自然にその気持ちが無くなっていくような気がします。その繰り返しです。なので、葛藤する時には深く話すことで、解決したり新たな学びにも繋がっている気がします。よく言うと、その都度、成長してきたのかなあともあります。周りの人に恵まれたし、自分も人の役に立ちたいし、認められたいという気持ちもありましたから、先輩に教えてもらったのだと思います。私たちは2期生で、先輩たちも県外が多かったので、リアルな現場の悩みを聞く機会がなかったのですが、中村先生が作られたピアサポートグループは、同世代の悩みを共有できる場となり、救われたこともあります。あと、もうひとつは、全然関係ない自分の趣味だったり、元々の友達とか職場とは関係ないところで息抜きをするのは大切だと思います。自分で支えていくシステムは自分で構築するみたいな感じです。様々な場所に、自分を支えてもらえるように作っておくと良いと思います。一方で、仕事で抱えたストレスは、仕事でしっかり解消しないと落ち着かないというカスツキリしないので、仕事に打ち込むことだとも思っています。違う世界の勉強を新たにしてみるというのも気分転換になりました。私は、社会福祉士は卒業してから通信でとりましたので、勉強中は新たな学びがあって気分転換になりました。今は病院が地域で果たす役割を考えたりしています。経験値のステージに応じて自分の果たす役割を自分で見つけていくことも長く続けているポイントかと思います。

中村

表現する、発信することは大事だと思いました。思いを受けとる人たちが「なぜ？」と整理を促すことで、どうして辞めたいと思うのか、辞めないためにはどんな方策があるのかを、考えるきっかけがあるだろうと思いました。安心できる場で整理できるということが三者に共通する思いだろうと感じました。資格の話がありましたが、新しい抛り所というのも必要だと思いました。

10年以上勤務された方々が現場でずっと続けてきたこと、現場での取り組みが教えてくれたこと、様々なヒントがありました。本日会場にお越しの皆さんも参考になったことを、それぞれの現場で実践を続ける上でのヒントにしていだければと思います。

今日はお忙しい中、三者の方々に準備していただき貴重なお話をいただきありがとうございました。

改めて拍手で感謝を送りたいと思います。

